九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州蕉門の研究 : (一)枯野塚と『枯野塚集』

杉浦, 正一郎

https://doi.org/10.15017/2332924

出版情報 : 文學研究. 45, pp.82-121, 1953-03-10. 九州文学会
バージョン :
権利関係 :

九州蕉門の研究

——㈠枯野塚と『枯野塚集』——

杉浦正一郎

宝永四年刊の京の井筒屋庄兵衛板『蕉門俳書目録』に

枯野塚　一　同　筑前晡扇野坡　一匁五分

と見えてゐる筑前の晡扇撰『枯野塚』集は之まで学界に紹介されなかつた珍書である。右の記載の中の「同」といふのは、まへの書目からのつゞきの刊年記載欄で宝永二年のことである。「一匁五分」は勿論書物の売価である。俳諧の研究は近来、長足の進歩を遂げ、従来知られなかつた多くの蕉門俳書も相ついで発見、紹介されて来たのであるが、それでもなほ右の井筒屋の俳書目に書名のみ知り得て原本の紹介されないものが幾つかある。それが殊に九州蕉門の撰集類に多いのであるが、この『枯野塚集』もその未紹介書のひとつであつた。

この度、その所蔵者である九州大学教授田村専一郎氏の快諾を得て、之を学界に紹介する事の出来たのは筆者の大きなよろこびである。今、本文をあとに全文翻刻することにして、ひと通りの解題のみを記してみよう。

『枯野塚集』、半紙本一冊、薄緑色の表紙の下半部に筥崎の松原を現はしたものかと思はれるが、松原の図が松の葉の濃緑と幹・枝の茶色とで略画に描かれてゐる。題簽は中央に「枯のつか　全」とある。原題簽もきちんと残つてをり、二百五十年の歳月が経てゐるにかゝはらず保存の良い美本である。丁数は四十二丁、柱は「枯　一」の如く記してゐる。第一丁表は白紙、その裏と第二丁表にかけて、見開きに筥崎神宮と枯野塚の図が描かれてゐる（挿入写真参照）。右側の枯野塚の横の家は撰者晡川の小庵であらうか。後述の如く明治二十六年に市睡の建てた添碑にも「枯野塚は宝永のむかし、此地の主晡川子の建る処なり」と言つてをり、大体晡川の庵の近くに塚を建てたものと思はれる。筥崎宮の山門に仁王が立つてをり、前景に松が多く、枯野塚の後は竹藪や田畑があつて、当時の様子が如実に偲ばれるやうである。二丁裏は又白紙、三丁表から裏にかけて、蕉門の故老たる江戸の杉風の「枯野塚序」がある。四丁表からが本文で「誹諧枯野塚集」といふ内題がついてゐて、杉風を筆頭に曾良、岱水ら六人の「東武奇進句」を巻頭にして、去来、怒風の「京洛奇進句」以下、各地の蕉門連中の奇進句が六丁裏までつゞき、そのあと、「博多福岡連衆」の四季発句が収められてゐる。十丁表から十二丁裏にかけて晡川の十里庵に於ける野坡を迎へての野坡、晡川、未雷、昌尚、菊虎、斗牛、曾呂、舎鷗らの連衆の歌仙一巻をのせてゐる。ついで、十三丁表から十五丁裏までに、福岡麁六亭に於ける晡川、麁六、野坡、為白、霜輪、禾名、千露らの歌仙一巻を収めてゐる。十六丁表からは発句集の春之部で、梅、桜、花、やまふき以下の春季の題の諸家の吟をあつめ、最後に「尾張の国笠寺を通りける時、宝前にてこの句を見付侍るよし、ある人かたりければ」と前書した芭蕉の句

笠寺やもらぬ岩屋も花の雨　　翁

が出てゐる。この句は、芭蕉が尾張鳴海の千代倉家の寂照に宛てた書簡には、「この御寺の縁記人のかたるを聞侍て」と前書して「かさ寺やもらぬ岩屋もはるの雨」とあり、又その千代倉知足撰の『千鳥掛』（正徳二年刊）には「奉納」と題して「笠寺やもらぬ窟も春の雨」と見え、大分時代が下るが尾張の暁台の『熱田三歌仙』（安永四年刊）には同じ句形に「笠寺にて」と前書してゐる。ところが、この句形とは別に寛治の『芭蕉句選拾遺』（宝暦六年刊）には「笠寺や窟ももらす五月雨」として出てをり、又、芭蕉直門の土芳が正徳頃に書きとめた『赤冊子自筆稿本』（山崎喜好氏が紹介された土芳編の『芭蕉句集』とも見られるもの）には之と同じ句形で出して「此句、尾張笠寺の絵馬に哥仙有、貞享五辰五月吉日と記ス。浅井氏是を写ス」と註記してゐる。寛治の『句選拾遺』は伊賀から材料を獲たのだから土芳のこの書留が材料になつてゐるのかも知れぬが、いづれにしても『枯野塚』所出の前書も、笠寺の宝前でこの句を見付けた、といふのも絵馬に哥仙が上つてゐたのなら、それを眺めての蒐録と見るのが自然であらうが、さう見ると、「花の雨」と「五月雨」と座五の季の異つてゐるのは注目に価する。土芳の書留も浅井氏の写したものによつたといふし、『枯野塚』の方も「ある人かたりけれは」と云つてゐて、どちらも直接の所見ではないらしいから、いづれを信じて良いか判然しないのである。

廿四丁裏からは「夏之部」の諸家の吟がつゞき、廿九丁裏からは「秋之部」、卅四丁表からは「冬之部」が収められてゐる。卅八丁表からは、「箱崎十里松」と題して、宗因、元順、言水、惟然、古道らの発句を並べてゐる。宗因の句に「大守公の御前にて」とあるのは、延宝九年のころ、福岡に滞在して、黒田侯に召されたときの吟であらう。この時、黒田侯は宗因を厚くもてなして羅致しようとしたが、宗因は宰府に遁れて法雲の許で受戒したのであつた。その宗因の句「御ン門や箱崎生の松かさり」や、元順の「両袖に涼しはこ崎生の松」、古道の「風や松にはぬるし十里潟」の句などを案

ずると、筥崎と生の松原で十里松とか十里潟とか言つた昔がはつきりする。後述の『枯野塚』の残つてゐる土地のあたりにも、昔十里松小学校といふ校名があつたと言ふし、晴川の庵号の一つである十里庵もさうした地名から出たものと考へられる。

卅八丁裏から「福岡 博多」として、支考、去来、野坡らの句が出てゐるが、「未雷亭をたつねけるに留主なれは、福岡に通り侍るとて」と前書した「五里の浜宿とり兼て鳴雲雀」といふ野坡の句や支考の「もろこしの菊の花さく五里の浜」といふ句からみると、今の博多港あたりの海岸が昔の五里の浜であつたことが分るやうである。この前書に見える未雷は、前引、井筒屋の俳書目にも

青密柑　一　同（註、宝永四年）博多未雷　一匁八分

とある、その『青密柑』集の撰者で博多の住人であつた。後に挙げるやうに鍬屋喜左衛門といふのが彼の本名である。この集も、今日なほ発見されてゐない散逸書であるが、かういふ撰集が若し出て来たならば、我々の博多福岡辺の蕉門末流の研究も大いに進歩するであらう。

野坡と去来の博多での吟がこの辺に残されてゐるのは、両人の九州行を考へるのに有難い資料である。野坡は元禄十一―十二年と同十五―十六年、去来は同じく十一―十二年の筑紫行がはつきりしてゐて、こゝの去来の「未雷亭いひ捨」と題する作品はおそらく元禄十二年秋、去来が長崎から帰洛の途次博多に立寄つたときの事であらう。そのあと、四十一丁裏にある利牛、岱水、芭蕉の三句は「この三句は京のかたよりきこえ侍る」とあるが、江戸での吟なるべく、芭蕉の連句資料として注目される。

以上で本文を終り、最後に去来の跋があるが、この去来の「箱崎の浦に枯野塚といふあり……」「ことし同門野坡ことにたひねせられしにすかりて此集とりたてけるよしにて……」のいふ文勢からみると、枯野塚そのものは、この跋のかゝれたと思はれる元祿十六年よりまへに築かれてゐたものかと思はれる。それについて思ひ合せられるのは、猪来の『蓑虫庵小集』（文政七年刊）所収の三月十三日附、伊賀の山岸半残、服部土芳宛の去来の書翰である。この手紙は文中に「下拙儀去年六月より西国ニ急用ニ而罷下り漸去冬罷上候。」とみえるから、元祿十三年のものと信ぜられるが、その中に「西国ニ而野坡も幸ニ下向参会ニて仕候ほ句なと少々御目にかけ申候。西国すち、惟然支考、又野坡等下向故、殊外先師之御流を好申候間、おひたゝしく俳偕発行仕候。長崎にも野坡相談にて、一ノ瀬と申処に先石碑立申候。筑前箱崎の松原に哺斎と申もの、先師の石碑を立、かれの塚と名を呼申候。愈以、先師の御名一天に満申候事ともに御座候。半左衛門様へも此段御咄し可被下候。」と去来は言つてゐる。こゝには哺斎とあるが、之は勿論筥崎の松原に晡川がこの枯野塚を建てた事を報知したものとみるべく、芭蕉翁の名が筑紫の果てまでひゞき亘つてゐる事の満足を同門に知らせ、併せて芭蕉の兄半左衛門の耳にも入れてほしいと云ふのであらう。晡川は、前に引いた阿誰軒の俳書目にも

染川集　一　元祿丁丑初秋日　筑前箱崎松月庵晡扇撰　八分

とある如く、之よりさき元祿十年の秋に既に『染川集』を上梓してゐたのであるが、晡扇、哺斎、晡川いづれも同人であらうと思はれる。なほ、紫白の『菊の道』（元祿十三年刊）には「筑前博多」と出てゐるが、この住地の博多は筥崎の誤りであらうか。

去来の跋によると、この枯野塚は、去来が元祿十二年秋、長崎から帰洛の途次、博多に立寄つたとき、例の「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」の句を「これそまことに、御句の聞納めなりし」等と昔物語をしたついでに、「幸にその夜侍者

にかゝせて人〳〵に見せ給ひける御句、我かたにあり、家に帰りはへらは、かならすをくり侍らん。かつは先師のかたみとも見たまへとちきりわかれ」たが、重ねて「みやこよりのたよりにこれをまいら」せたのである。この「侍者」にかゝせたといふ「侍者」は、支考の『笈日記』（元禄八年刊）に「此夜深更におよひて介抱に侍りける呑舟をめされて、硯の音のから〳〵と聞えければ」とあつて、呑舟のことである。即ち呑舟のかいたものを晡川は獲たわけであらう。晡川はその去来より贈られた好箇の記念品によつてこの枯野塚を建てたのである。それはいつの事であるか、明確にはしがたいが元禄十三年ごろの事のやうに去来の跋で感じられる。去来はそのあとに、「ことし同門野坡こゝにたひねせられしにすかりて此集とりたてけるよしにて」と言つてゐるから、この『枯野塚』集の撰の成つたのは奥書にも記す通り「宝永甲申（註、元年）夏」の事であらうが、塚の建立と記念集たる本集の出版との間には相当の年月がへだたつてゐるのでないかと思はれる。

ところが、残念な事に、この塚は中央には余り知られてゐなかつたと見えて、宝永七年に江戸の蕉門桃隣が芭蕉の十七回忌追善集として上梓した『粟津原』に「芭蕉居士諸国之墳所」と題する一項があつて、それに

一箇所　伊賀上野万福寺　生囲親属建之
一箇所　江州粟津原義仲寺　門弟中建之
一箇所　美濃大垣城外正覚寺　此国之門人建之
一箇所　京東山双林寺　門人建之
一箇所　大坂道頓堀千日寺　門弟建之

一箇所　江戸深川長慶寺　門葉建之
一箇所　肥州長崎南京寺　西国門下建之
元祿年中ヨリ宝永年中マテ九七ケ所

と、之だけ記されてゐるが、この中にはこの枯野塚は逸せられてゐるのである。

かくて、枯野塚は去来の縁によつて筥崎に建てられたものであるが、その去来と晡川との関係はどうして生れたのであらう。そこに私は博多の俳人昌尙の存在を考へるのである。昌尙は『枯野塚』集巻末の野坡の句にも「昌尙亭にて、博多という題をのそまれければ」とか「昌尙亭廿二日」とかあつて、野坡もその家を訪ねてゐるやうであるが、この昌尙は本集と同じ宝永元年刊の筑前季水撰の『土大根』、その他紫白の『菊の道』や支考の『西華集』などいくつかの集にも句の見える人である。ところが支考の『梟日記』（元祿十一年刊）の、元祿十一年七月廿六日、博多の条をみると、

此日、昌尙亭にまねかる。此あるしは落柿舎の去来いとこになむおはせは、そのこゝろをおもひ出侍りて

さひしさの嵯峨より出たる熟柿哉

とあつて、去来のいとこだと支考は云つてゐる。即ち昌尙は去来の母方の叔父に当る黒田藩士久米諸左衛門の子であらうと思ふ。さうすると、同じく去来の従弟と推定される去来の追善集『誰身の秋』の撰者久米氏玄察とどういふ事になるのであらうか。同人なのか別人なのか、之はなほ確証を得ないので後考をまちたい。去来は幼少のころ、福岡のこの叔父の家に養はれて、その許にあつたといふから、昌尙の家は去来にとつても縁りの深い家であるべく、この昌尙を通じて去来と晡川は親密に結ばれたものかとも考へられる。福岡の地は、去来の兄元瑞の孫に当る向井元仲兼般の記した「落柿舎去

来先生事実」に「国主（筑前福岡黒田侯）大奇二先生才芸一、欲下以二米地一招上、固辞不レ求レ仕」とある事からみても彼にとつてゆかりの深い土地であつた筈である。

去来はさうした因縁のなつかしさにひかれて大切に秘蔵してゐた翁辞世吟の呑舟の書留を約に従つて晡川に送つたものであらう。晡川、又去来のこの好意に感激して、折から廻国して来た蕉門の高弟野坡に墓碑銘の揮毫を依頼してこの枯野塚が出来たものであらう。去来はこの『枯野塚』の跋を書いた元禄十六年の翌宝永元年九月十日、五十四歳で歿したから、同年夏（奥書）に上梓された筈の本集はやつとその生前に見るを得た事でもあらう。

前に引用した『蓑虫庵小集』所収の元禄十三年三月十三日附、伊賀の半残、土芳宛書簡中に、去来は「長崎にも野坡相談にて、一ノ瀬と申処に先（本ノマヽ。先師の誤りか）石碑立申候」と言つてゐて、元禄十二年冬、野坡撰文の時雨塚が長崎一ノ瀬街道に建てられた事を報じてゐる。この碑は、文政年間に、饒田喩義の著はした『長崎名勝国絵』にも「芭蕉翁の発句塚は一ノ瀬にあり。野坡碑文を撰せり。歳月を経る事久しくして、今や此碑の所在を失す」と言つてゐて、夙く行方不明になつたものらしいが、その翌十三年の春、東帰の途次この筥崎で揮毫したと思はれるこの枯野塚の方が二百五十三年の歳月を経て、今日なほ健在してゐた事は有難い事で、西国の翁塚として最古のものであるのみならず、全国的にみても、芭蕉塚の最も夙い四、五基中の一つで特に珍重すべきものである。

さて、次に『枯野塚』集本文中に写真を掲げた枯野塚の絵図であるが、左の筥崎宮の絵は二百五十年の歳月を経てゐるのに、その境内は今日の景観と余り変つてゐないのは面白い。石の鳥居は当時のまゝの様子だし、井戸も手水鉢も今も同じ位置にある。現在ある井戸は天文二年に堅粕村の安武次郎右衛門がつくつたのを、天和三年に仕替、之を同村同姓安武

氏が明治十一年に再興したものである事が井戸の縁石にほりつけた文字によつて知りうる。手洗石の方は天文二年建立以来、度々修理を重ね、貞享五年八月の法橋源姓藤井玄三敬書の文字も見えるが、大正十五年五月に吉塚区で改修した旨の識語がある。而して、井戸の方は、土石が埋められて井戸の用をなさなくなつてゐるためか、この絵図のやうな上におほひの屋根は現在ではなくなり、反対に手洗石の方に屋根がついてゐる。絵馬殿も大正十五年のものらしいが位置はこの絵図と似たところにある。絵馬殿のまへの神木は今は枯れてしまつて、横に別の木が植ゑられてゐるが、当時はよく繁茂してゐたらしく図に見える。楼門の仁王は宮の方の話では今は破損して、しまつてあるよしで、現在は仁王の代りにこま犬が一対おさめられてゐる。この点はちがふが天文の建物は同じやうである。門のまへに石段があるが、之は現在ないやうである。

さて、この図の右半分にかゝれてゐる小庵は撰者晡川の隠棲松月庵（又、十里菴ともいふ）であらうと思はれ、そのまへの塚が枯野塚なのであらう。晡川の庵については、『枯野塚』集中に

三月十二日　十里菴興行

春雨や松の隣の枯野塚　野坡

という晡川、未雷、昌尙らとの歌仙の発句があり、この発句に晡川自ら

箒の先におこす山ふき　晡川

とつけてをり、又

十里菴をたつねて

さひしさの椿咲けり浜ひさし　連山

晴川をたつねて

若竹を見立てたつる菴かな　晦朔

十里菴にて福岡の

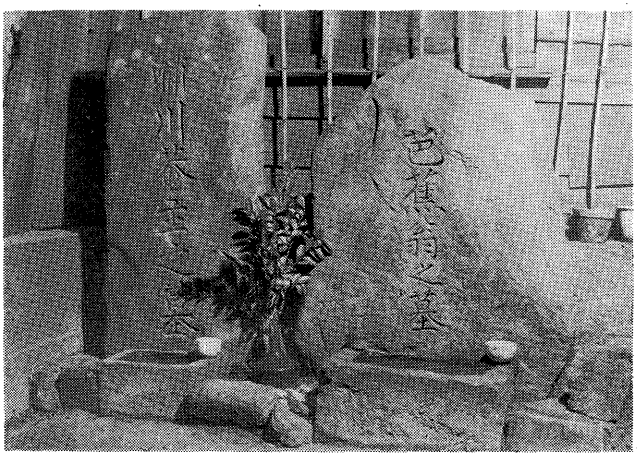
連衆もよほされ

留別の会に

行春や座はかきさかす松露取　野坡

等とあるところからみると、彼の松月庵は筥崎の十里の松原の中にあつて、若竹や椿や山ふきのある、すぐ近くに松露も拾へるやうな「浜びさし」風なものであつた事が推量される。この絵図にも庵の横に竹林が描かれてをり、前後に松原があるやうである。

さて、この絵図は筥崎宮と接近して見開きに書かれてゐるので、枯野塚も宮の境内か、又は外側にしても近所かと思つて随分探索したのであるが判らなかつた。ところが郷土史研究家の筑紫頼定氏の示教と国文学科の特別研究生大内初夫君の努力とによつて遂に枯野塚をつきとめる事が出来たのである。枯野塚は筥崎宮から十丁ばかり離れた馬出の路次の奥にあつた。出口対石氏の『芭蕉塚』（昭和十八年刊）には翁塚が吉塚にあると記されてゐるが、あとで考へてみると、絵図には宮と塚との間に雲が描かれてゐて、その雲で距離のある事を示してゐるのであつた。馬出（まいだし）の電車の停留所を医学部の方にバス道を二百米程ゆき、八木病院の斜前の路次を入り、電車道をつきゝると左側に美容院とくりもの屋との間に幅一米程



の路次がある。入り口には「おつなの旧跡地、並ニ雁の塚」といふ小さな石標が立つてゐて、その奥へ二十米程入ると民家に囲まれた三四坪程の空地に出る。正面には表に「園通院義操妙綱大姉」、裏に「寛永七年三月三日、俗名麻井おつな」と記した大きな墓がある。之が「つなの旧跡」であつた。おつなは博多で有名なおつな門の怪談の主で、夫の妾狂ひを悲しんで、寛永七年桃の節句の日に二児を道づれに自殺した黒田藩士の妻である。つなの墓の左に可愛いゝ二児の墓が並んでゐて、各々「芳善玉露童女」「秀善諸光童子」と読まれ、碑背には母と同じ歿年月日が記されてゐる。この路次の入口のむかへに貯木場があるが、こゝはおつなの池の跡で、この辺はおつな御殿の跡だと伝えてゐる。現在なほおつなの墓に香花が絶えないのは男女縁切りの俗信のためだといふ。おつな母子の墓の左に表に「旅に病て夢は枯野をかけめくる」と大書した大きな石碑があり、その左に小さな地蔵さまがある。その又左に高さ八十糎、幅六十糎、厚さ十糎位の碑が建つてゐて、表の中央に「芭蕉翁之墓」、その左下に「野坡書」と小書して彫まれてゐる。之こそまぎれもなく永い間私のさがしあぐんでゐた晡川の建てた枯野塚であつた。入口の石標の「雁ノ塚」といふのは「枯野塚」の発音を土地の人がなまつて、このやうに俗に言ひつたえて来たのであらう。なほ、その枯野塚の左に塚の

建立者晡川自身の墓の建つてゐた事は望外のよろこびであつた。それは芭蕉塚とほゞ同じ位の大きさの四角な石の碑面中央に「晡川菴主之墓」と大書し、その両脇に「正徳三癸巳年正月初三日」と忌日が記されてゐて、こゝに晡川の歿年月が明らかになつたのである。晡川の享年については、『枯野塚』集の杉風の序文に「ことし、七十年来まれなる老の手に」と言つてをり、この杉風の序は、去来の跋と同年と思はれ、去来の跋は「ことし同門野坡こゝにたひねせられしにすかりて」とあり、野坡の博多に来たのが元禄十六年春のことだから、元禄十六年に七十歳とすると、歿年の正徳三年は八十歳となる。従つて『枯野塚』を上梓した宝永元年はとし七十一歳であつた筈である。

晡川はその前著『染川集』（元禄十年刊）の諷竹の序文にも、

此集の撰者、松月庵晡扇へつくし箱崎のほとりにひさしく風雅をたのしミ、閑なる今日をよろこへり。其信、鬼神も感を催せさらんや。年来芭蕉翁の風躰を乞したひ、彼是の門友を扣キおこしてなを風雅やむことなし。云々

と云はれてゐる通り、夙くから芭蕉追慕の念のあつかつた人で、その真情が芭蕉直門の去来や野坡を敬慕する心持ともなつたのであらう。『枯野塚』集にも

去来子にわかれしとき　晡川

みのむしのついても行ん旅の袖

といふ心のこもつた句をものしてゐるのである。晡川は前著『染川集』をみると、前記の如く諷竹の序文を貫つてをり、集中には芭蕉の「春もやゝけしきとゝのふ月と梅」の句をはじめ、土芳、惟然、舎羅、野明、卯七、去来、文艸、臥高、游刀、探志、正秀、猿雖、卓袋、知月（マヽ）、野紅（又、野江とも書いてゐる）、壺中、蘆角、風国、昌房、芙雀、朱拙、釣壺等

の蕉門名家の句が入集してをり、殊に

面六句

年〳〵に味ひかはるしくれかな　諷竹

冬木の中に松ハ目出度　晡扇

よい筋にかゝれは道もはか取て　舎羅

内外の者に酒をのまする　東明

戸障子も皆新き月の影　芙雀

だん〳〵雁の早う来揃ふ　執筆

といふ大坂の連中との附合があり、前出諷竹の序のつゞきにも、「ある夜、不思義（マヽ）の霊夢をうけたり。其まゝ捨をくへきにもあらす、おそれなからワキをならへ、第三を乞、其外拾ひ置たる巻のはし〳〵、発句ともをあつめ、上京の序一部になして染川集と名付られたり」とある如く、上京したついでに蕉門の人々と因みが出来たものとみるべく、殊に諷竹や惟然とは関係が深かつたやうである。集中の惟然の句に

つくし安楽寺に詣しころ

神御楽のよし

これにしの梅のわらひや日の移り　惟然

といふ句があるから、惟然の九州行のとき蕉門との縁が出来たのかも知れないが、いづれにしても、去来との因みも『枯

野塚』所載の如き去来西遊のとき筥崎に彼を迎へる以前からあつたのである。なほ、美濃の魯九の『春鹿集』（宝永三年刊）をみると、魯九は宝永二年西国行脚をしたが、彼は小倉から大橋、椎田、中津、松崎、宇佐、真玉、日田、小国、内の牧、熊本、川尻、長崎、福島、久留米、田代、宰府を経て、秋風のころ博多に着いたのであるが、博多での連中の句にそれぞれ本名が書いてあり、『枯野塚』入集の晡川の仲間の事が知られるのでこの辺りの条を次に記しておかうと思ふ。

仝（註、筑前）　博多ふくおか

長崎の人々に便りせられて未雷、一定をとふ。折ふし留主なり。此外又とふへき人を持す。

尋子人のなひ迷ひ子や秋の空　魯九

はこさき枯野つかに詣て

さひしさを取ひろけたるすゝき哉　仝

すら〳〵と烽をはこふや蔦楓　原田氏

踏かゝる水のにこりやひろかしへ　一定

目まきれになるや花咲草の原　十里菴

明方に馬のかぎ出す野菊哉　晡川

芋の葉の露ころへかす袂かな　鍬屋喜左衛門

稲妻の出かへりやすき闇夜哉　未雷

闇夜ともいわて初るきぬた哉　広福庵

泉庵　曾呂

淀屋半二郎　舎鷗

小坂氏　麁六

霜輪

打かふるすゝきや袖のふり廻し　八反左平次
秋立や雲にミち合海の果　塩田太吉　為百　万季

即ち、魯九もこの尾花のさびしさの中に立つ枯野塚に詣でたのであつた。

さて、田村教授の御好意によつてやうやく見る事の出来たこの『枯野塚』集は夙くから行方を逸して人々の目に触れなかつたらしいことは、天保十年の宇逸らの上梓した『夢塚集』にも見える。この集は先日「フクニチ」新聞紙上に、その碑銘によつて芭蕉が太宰府に来たと発表されて物議をかもした宰府境内にある例の「夢塚」の建立記念集であるが、その末にこの『枯野塚』集の杉風の序、去来の跋文をのせてゐる。そして其の説明として、

このふたつの文は、宝永甲申のとし、浅生庵（註、野坂）箱崎の晡川が風雅をたすけて、枯野塚をいとなめる序跋也。今此集たえてしる人なし。さきに一枝庵（註、川越士焉）の先生、これを帋魚の巣中にひろひ　云々

と言つてをり、天保の頃既に極めて稀覯本になつてゐた事が判るのである。

なほ、この『枯野塚』には後集がある。それは市睡撰の『後枯野塚集』（明治二十六年刊）である。之も田村教授の好意で拝見出来たのであるが、同集は半紙本一冊、青表紙の左肩に「後枯野野塚集」と題簽がついてゐる。本文は二十二丁の小冊子だが一丁裏から二丁表にかけての見開きに枯野塚と、新たに芭蕉の二百回忌に建立した大きな句碑の淡彩図が大体今のまゝの位置に並び、更にその右に枯野塚よりやゝ小さな碑が建つてをり、背景には何かさるすべりのやうに見える木や芭蕉や少し樹木がかゝれてゐる。図は塘雨の筆にかゝる。今は葉蘭がほんの少し生えてゐる丈で実に殺風景な姿だが、明治二十六年当時はこの図のやうに風雅な土地であつたのであらう。右端の小碑は晡川の墓かとも思はれるが、晡川のは

四角な石だのに図はさうでもないのでちがふかも知れない。しかし、今のやうにおつなの墓や子供たちの墓はこゝには見えないから当時はこゝにはなかつたのを後に芭蕉の墓と同居させたものであらう。二丁裏には、野坡書の枯野塚の図と、その左に前にも記したやうな新たに建立した句碑が碑銘を白字摺にして掲げられてゐる。それには

旅に病て夢は
枯野をかけめくる

七十齢小蓑庵市睡敬書

とある。このあとの「市睡敬書」の一行は、今見えないのであるが、之はその後石が欠けてなくなつたものかどうかはつきりしない。前の塘雨の図によつて石の様子を案ずると、どうも石が欠けたやうにも思へない。おそらく市睡の揮毫にかゝる事をこゝに碑文にあるかの如く記したのであらう。そして、その左に

裏　銘

枯野塚ハ宝永のむかし、此地の主晡川氏（註、氏の字、碑文は子となつてゐる）の建る処なり。其塚の魂なる祖翁の高吟を添碑にあらはして、今とし二百年祭の記念とす。

明治二十六年癸巳十月十二日

と碑背の文字をこゝに掲げてゐる。なほ碑背には、この文章の下に市睡ら連中の名が沢山列挙されてゐる。本文は

明治廿六年十一月十二日
芭蕉翁二百年祭奉納

俳諧之連歌

旅に病て夢は枯野をかけめくる　遺吟

之を立句として市睡以下の百韻一巻をはじめとして、そのあとに諸家の奉納吟や余興が並んでゐる。その中に

今たひ枯野塚の添碑を建設
セれしも曾て晡川居士の
心をこめられし其家在るか
故なれハとて、建碑の工を
竣へし日、居士か霊魂を慰
さめはやと、墓前に席を延
、いさゝか追福の典を執行
ひつゝ

俳諧之連歌

むしりさす塚の小道の五形花かな　晡川居士

之を立句にしての素白、市睡らの歌仙がある。この晡川の発句は、『枯野塚』集の麁六や野坡らとの七吟歌仙の立句で、同集には

福　岡　麁六亭

むしりさす塚の小路の健花哉　晡川

として見えてゐる。

以上で『後枯野塚』の説明を終るが、『枯野塚』本集の杉風の序文によつて、塚建立の年次に疑問をいだかれる向きもあるかと案ぜられるので追記したいと思ふ。杉風の文に

粟津のはせを塚は尤なきからをおさめしところ也。深川の発句つかは芭蕉菴にみつから書のこされし笠の記略〻、世にふるもさらに宗祇のやとりかな、この句を築こめ、しるしの石は造化の工をそこなハす、自然に苔ふるひたり。長崎の時雨塚は門人野坡かをの〳〵のぬるゝもひとつしくれ哉、といふ句に人〳〵も時雨の句を奉りて、塚のあるしとせしよし。なを美濃、あふミ、伊賀のかたにも其沙汰きこゆ。しかるに、此撰者晡川は遠境をたより、門下のおもひをなし、こゝろさし切にして、ことし七十年来まれなる老の手に石をあつめ、土をつかねて夢はかれの〻病中の吟を、さかの〻去来より伝えてこれを塚のたましゐと納め侍りて、年月十里菴に枯野塚奇進の句をあつめ世にひろむるよしにて序を乞侍る。云々

とあつて、この序文の書かれたと思はれる元祿十六年に晡川が枯野塚を築いたやうに見える。しかし、之は前引『蓑虫庵小集』所収の元祿十三年三月十三日の去来の手紙に既に枯野塚が建つてゐる事を言つてゐるし、『枯野塚』集の去来の跋からも早く建つたものである事を暗示させられる。又、同集の

杜野塚十二日の興行はしまりけるに

花の次の出合はしめは十二日　　野坡

の句にしても、元祿十六年春、野坡が筥崎に来たとき塚が建つてゐないと都合が悪く、かたがた、杉風がこの序文で十六年に建立されたやうに書いたのは、遠境の江戸にゐる彼が、塚の記念出版が建立から何年も経つて上梓されるとは思はな

かつた事による思ひちがひとみるべきであらうと考へる。野坡は元祿十二年秋、長崎で時雨塚を建て、その帰途筥崎でこの枯野塚の碑文をかいて行つたものとみるのが最も自然のやうである。

いづれにしても、之と同じころ建つた長崎の時雨塚も魯九の『春鹿集』の廻国のときに、さきに熊本で詣でゝゐる熊本助成寺の住僧使帆の建てた茶の木塚と呼ばれた翁塚も、みな今行方不明になつて亡びてしまつてゐる中に、たゞこの筥崎の枯野塚のみが市井の路次裏に人に忘れられてゞはあるが、なほ二百五十三年の歳月を経つゝ立派に残つてゐたことは興味の深いことである。今年は芭蕉の二百六十回忌、去来の二百五十回忌に相当するので、東京や去来の故郷長崎でそれぞれ記念の催しが開かれることになつてゐる。そのとしに当つて去来ゆかりの芭蕉塚が世に出て、その由来や価値が再認識されるに至つたことは寔によろこばしい次第である。

本稿を草するに当り、田村専一郎教授、筑紫頼定氏の両氏から種々恩恵を蒙り、学恩をいたゞいた。又、九大文学部特別研究生大内初夫君の懇切なる援助を得た。記して深甚なる謝意を表する。

（昭和二十八年二月廿日）

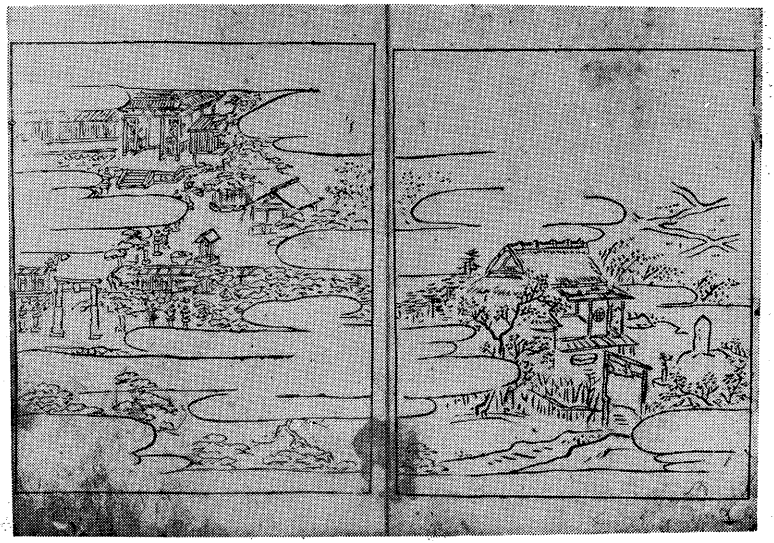
枯のつか

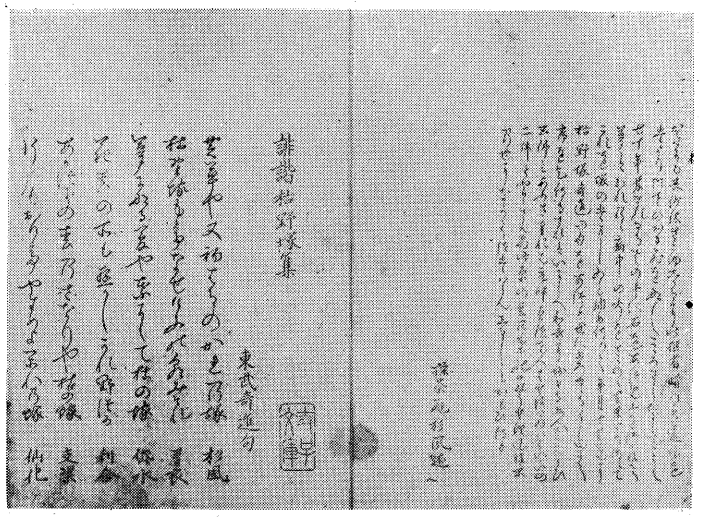
全

枯野塚の図（次頁写真の通り）

一丁裏と二丁表との見開きにあり。

二丁裏は白紙にて本文は三丁表から始まる。





枯野塚序

亡師芭蕉翁、ことの葉のしけりふかく、諸国の門人句をかよはし、あるはところ〳〵の名所見せたきよしを願ふにたよりて、病身なから廻国の心たえす、終に元祿七のとしの冬、難波の夢となりたまふに、くに〳〵の門葉、其外いまた杖曳たまはぬ所まてしたひなけき、塚をつき、石碑を立、あるは絵像を拝す。粟津のはせを塚は尤なきからをおさめしところ也。深川の発句つかは芭蕉菴にみつから書のこされし笠の記略　世にふるもさらに宗祇のやとりかな、この句を築こめ、しるしの石は造化の工をそこなハす、自然に苔ふるひたり。長崎の時雨塚は門人野坡か、をの〳〵のぬる〻もひとつしくれ哉といふ句に、人〳〵も時雨の句を奉りて、塚のあるしとせしよし。なを美濃、あふミ、伊賀の二三ヵかたにも其沙汰きこゆ。しかるに此撰者哺川は遠境をたより、門下のおもひをなし、こゝろさし切にして、こ

とし七十年来まれなる老の手に、石をあつめ、土をつかねて、夢はかれの〻病中の吟をさかの〻去来より伝えて、これを塚のたましゐと納め侍りて、年月十里菴に枯野塚奇進の句をあつめ、世にひろむるよしにて、序を乞侍る。されはいにしへ、和哥に妙なる五人をえらひ五仏とあふき奉れは、元師貞徳老人・はせを翁ハはいかいの二仏とや申さん。尚此原の松の葉の散うせす、風雅末の世になかくつたハらんしるしとおもひ侍る。

採茶庵杉風述

誹諧枯野塚集

東武奇進句

芝草や又初はるのかれの塚　杉風
枯野塚もてなせけふの朝みそれ　曾良
夢になる夢や葉にして枯野塚　岱水

花松の所もゆかしかれ野つか　利合
あかつきの松のさなりや枯の塚　支梁
行雁もおりてやすめよかれの塚　仙化」四オ

京洛奇進句

種や飛千里の外の枯野塚　去来
翌よりもこの日の暮を雪の塚　怒風

難波奇進句

梅一重とゝけつくしの枯野塚　諷竹
目ふさいておもへはちかしかれの塚　舎羅
その節も今降雪もかはらねと　三惟
月に澄花にさかえよかれのつか　芙雀」
花はさそ手ことに誰も枯の塚　車庸
此道をとはすともゆけ枯野塚　母風
うくひすの陰はかり也かれの塚　天垂

美濃奇進句

松原の名よりもまされかれのつか　魯九
海つらのとちやしくれの枯の塚　嘯風
古墳や誰か手にさゝく初松露　国錐」五オ

尾州奇進句

年〳〵にふえて芽立や塚の草　露川
松並に雪のうねりやかれの塚　素覧

豊後奇進句

あら塚もかたまれ袖の時雨先　朱拙
家つたひのかやりもさひし枯の塚　李千
手水ほと水もなかるゝかれの塚　斗梁
旅人のとかめもゆかし枯野塚　りん」
なつかしき夢のはなしやかれの塚　紫道
風呂敷の徳とりとめし枯野塚　寂芝
かけまはる終の宿りやかれの塚　野紅

筑後奇進句

やまふきや跡尻去する枯野塚　晦朔
古墳の海にもちかき月夜かな　佐越

手のうちに薄の露やかれのつか　般里
懇に菜畑も覗く枯野塚　羊我」六オ
十二日の会にまいりあひて
春雨やをの〳〵ぬれて枯野塚　木子

春

博多福岡連衆

おもひ出すさくら咲けり枯野塚　菊虎
咲口の梅も見えけりかれのつか　雲柳
うくひすの初声きかん枯野塚　舎鷗
青柳も所柄ふく枯野塚　左由」
咲かゝる花のもとりや枯野つか　泥手
うくひすの声の細さよ枯野塚　随柳
かけろふや葉先も揃ふ塚の艸　霜輪
足もとに蝶やもつるゝかれの塚　一徳
やまふきの一重散けり枯の塚　為百
入相や苗代時の枯野塚　和水
入まはる汐干の人やかれの塚　連山
鈴かけの咲こほれけり枯野塚　さい」七オ
苗代や燕のよこすかれ野塚　僧礒松
朧夜や連待合す枯のつか　万里
つれられてけふや花見に枯野塚　一楽
如月や雁もなこりのかれの塚　一光
つはくらや三遍まはる枯野つか　少年羅月

夏

塚まうて今朝は袷に麻羽織　未雷」
草の葉の畳んで涼し枯野塚　麁六
ふきたつる蔦の紅葉やかれの塚　吟行
せり売の涼みによるや枯野塚　夕立
蝙蝠の出るまてかたれ塚の前　其白
猫の背や麦穂に見えて枯野塚　是計

若竹や枝持そへて塚の礼　不白

一畦の麦も有けり枯野つか　僧會呂」八オ

秋

枯野塚あたりの粟も気色哉　小雨

山雀の羽のすえたやつかの前　怡々

桐の葉の落てかさつく枯野塚　不離

直あてに雁の通るや枯野塚　不玄

しら菊のつぼみも細しかれの塚　運ト

月の夜や独来て見る枯野つか　立湖」

十六夜や山道つくるかのの塚（マヽ。墨書にて「れ」と改む）　如雪

いさよひや旅人送る枯野塚　禾名

冬

ふゆ牡丹はしめてきるや枯野塚　昌尚

はつゆきや中途でおかむかれの塚　一定

枯のつか　全

初しくれ月夜に降やかれの塚　和風

行あたる人に問けりかれのつか　僧蓮餃」九オ

僧と僧出あふて噺す枯野塚　僧東背

水仙の隅につぼむやかれのつか　路遊

簑着たる人の出入や枯野つか　稲里

梟の声のあたりやかれの塚　松栄

薄雪やあふら火消て塚の菴　舎鷺

晩鐘や牛の声きく枯野塚　僧山風

かん菊の真向にさくやつかの道　我笑

枯野塚指ふるかたや壱岐つしま　斗牛」

十里菴興行

三月十二日

春雨や松の隣の枯野塚　野坡

箒の先におこす山ふき　晴川

うしの子を追こむ小村長閑にて　未雷

海一枚に川のなりたる　昌尙
三日月にあふちの花の落かゝり　菊虎
談合きめて皆わらちとく　斗牛
最中と寺の普請を取乱し　曾呂
垣の縄目をつゝく鶏　舎鷗
うき恋の便も伯母のせハらしく　晡川
此はつなから暑い七月　野坡
あり明に猪おとす窓あけて　昌尙
手をさし込ふて直きる落鰷　未雷
月額もそらぬ所に生れ合　斗牛
又風くさくみゆる雲行　菊虎
膳か出てはら〳〵女中立替　舎鷗
状添て来る伊勢荷二固　曾呂
わすかなる梢を荷の咲こほし　菊虎
独ほと〳〵茶摘ゆく也　晡川
玉水は左こつちは雉鳴て　野坡

定家はかりか恋ハめされす　昌尙
したらくに居るて節句の心なり　未雷
湯やら飯やらつかふ病人　斗牛
西風になをれは雨を吹込て　曾呂
さらりと夏の穂先あからむ　舎鷗
僧正に面して免す横刀　晡川
銭百あれは美濃を見て来　菊虎
十月の空うつくしき十三夜　斗牛
よういたゝいた祖父か盃　野坡
竹原の中から付し内証道　昌尙
おもひのほかに降ぬ卯のを　未雷
居るところはかり四五畳表かへ　舎鷗
日のつんふりと暮る行水　曾呂
横になし縦にも物は忍ふらん　菊虎
耳もつ役に雲雀きゝけり　晡川
青みたる間に花をこきませて　野坡

片帆にはしるかけろふの岸　　霜輪

野坡　五句　　禾名

晡川　五句　　千露

未雷　四句　　晡川

昌尙　四句　　麁六

菊虎　五句　　野坡

斗牛　五句　　為百

曾呂　四句　　霜輪

舎鷗　四句　　禾名

斗牛」十二オ

」

福岡　麁六亭

晡川

むしりさす塚の小路の健花哉　　麁六

追ふて荒波に出る蝶〳〵　　野坡

との見せもふんそり返る春の来て　　為百

包たうへをなふる獅子舞　　霜輪

枯のつか　全

宵月の稲の穂先を照ちらし　　禾名

元服したきのちの出かハり　　千露

うら町も小鰯時の鍋せゝり　　晡川

河内の飛脚今朝立てゆく　　麁六

ぬり物の下地をちよつと見せに来る　　野坡

内義の飲めてとれる酒盛　　為百

ほろ〳〵と降出す空の雪めきし　　霜輪

高あけておく籾のへり代　　禾名

吉左右は住持の下リおそなはり　　千露

たれもしらすに戻す入聟　　晡川

有明に涼しう曇ふきかけて　　麁六

うこかしてみる辻中の石　　野坡

飛あるく彌生は花の蘂に成　　為百

水田のへりに鴉さえつる　　霜輪

菴の内炬燵ふさいて心よさ　　禾名

めし時しるゝ城の小便　　霜輪

為百」十三オ　　禾名」十四オ

板橋に材木あける船つけて　千露
ぜんそくやみの咳たゝれたり　晡川
紫陽花の人たけほこる垣隣　麁六
翌のとまりは関かつち山　野坡
買手なき節句の店の生肴　為百
絹布の肌をいらふ秋風　霜輪
目にさハる木槿の花を伐てのけ　禾名
三日月迄は先日和なり　千露」
自慢する内に娘のひねくろし　晡川
有馬の人の判とりに来る　麁六
祭見る片手に蛸をはさまれて　野坡
そつそと足をのはす寸白　為百
雪隠は上下ともにふさかりぬ　霜輪
けふ一日の雨のさひしさ　禾名
野も山もまるめて花の咲かゝり　麁六
雉子と雲雀の押あふて啼　千露」
十五オ

晡川　五句
麁六　六句
野坡　五句
為百　五句
霜輪　五句
禾石　五句
千露　五句

春之部

梅　柳

梅咲てなをうこかすや馬の鼻　岱水
里いそく夜道をとめし梅おろし　杉風
むめかゝの軒をつきぬけ凧便宜　怒風
から猫の花にもなくか軒の梅　利合
また風の骨はあれともむめの花　芙雀」
十六オ

梅か香にはしり過たる月夜哉　ゆき

六めかゝや二月も雪の役と降　ナカサキ　単才

これは奉納の句なるよし

新宅やとりも直さすんめの花　ふんこ　涼巴

半天に押出す梅の匂ひかな　晡川

下えたに追つきたかる柳かな　りん

押のけて大道に出る柳哉　斗牛

青柳や互に落る軒雫　一定

手のひらにのずる柳のしなへ哉　江立

青柳に背入るゝ雀かな　野紅

やなき吹風にすはやき小鮎哉　未雷亡父　一知

備中倉敷にて千句興行の時

巻頭

なに〳〵の玉や並へて梅の花　舎羅

梅さくや藁にしてみる居間の屋ね　松栄

海山に枝のさはきや梅の花　舎鷗　十七オ

桜

枯のつか　全

咲かゝるさくらに似たる夜明哉　筑後とね

にちまする空やせかせて初さくら　りん

野鴉の落つく方やはつ桜　麁六

皆迄は見らぬさくらの盛哉　野坡

並杉の間にはさまる桜かな　曾呂

うきたゝぬ星の出かたや初さくら　野紅

細引のさくら咲けり竈の上　泥手

左由亭にて

我人にあてゝ向ひの桜かな　方税

垣並を直して通るさくら哉　チクコ　羊我

此雨の間あらせよはつさくら　磐井

約束にけふは寐てゐる桜かな　菊虎　十八オ

花

招酒伴

故人やれしはらく来れ軒の花　舎羅

出をんなの物うき花のあしたかな　我峯

はつ花や鯰の外も青きもの　フンコ　紫道
このころの華のこゝろて鳥の声　肥前婦　紫白
花待や寺にも一夜行かゝり　トンノ　杉明
ちる花や鍋売通る寺の脇　カンタ　市水」
さそはるゝ行先〳〵の花見哉　浦川
日暮して町屋に入や花の道　日田　朱拙

やまふき

山吹の花を雛の鯰かな　未雷
やまふきに竹もちかくる日傭哉　浦川
山ふきや雫を落す木履道　ナクフ　楚鉄
歎冬やことしも寒し二人口　禾名」十九オ
やまふきや膝に置たる握飯　左由
歎冬や匂ひにちらす鯛のこけ　一定
すみれ花握りなからや子の鼾　舎鷺

鶯　鳥

うくひすや梅の外をも数に鳴　昌尚
うくひすやなしみのつかぬ武家隣　岱水
鶯の鳴て見付る藪の家　ちくこ　ひさ」
黄鳥に言葉かけけり二階口　クフテ　流水

豊後君か原にて

うくひすや一声ほしき君かはら　未雷
はつ花や鶯も日の暮しそめ　天垂
着更衣の空に点打雲雀哉　ガンタ　紅玉
むき〳〵の連や雲雀の鳳巾　霜輪
鶯のなく日も曇る片精進　水麦
縫ものゝ膝にあけるや雀の子　ひさ」二十オ
はるさめやお城の堀に鳥ふたつ　左由

筑前にゆく人をしたひ

行鴈の跡追ひするや雉の声　木子

草原にまとゐして、をの〳〵発句案しけるに、斗牛の僕申出ける句

鮎の子をとらえてみする馳走哉　孫一

汐干

あら海に牛追入るしほひかな　菊虎「
はら〳〵と松を植たき汐干哉　左由
幾度も晦乞する汐干かな　怡〻
いそかしく帽子ふくるゝ汐ひ哉　りん
提重に土圭添たかけふの海　三惟

桃

客立て遊ひ直すやもゝの花　古道
水汲の癖になりたり桃の花　般里「廿一オ
またもゝの淋しく咲て水の筋　野紅
しら桃やまかつてはいる部屋の口　不白

梨

なしの花もたれて咲や門はしら　晡川
肩すれる壁際行や梨の花　左由
塩の来ぬ浜の遊ひやなしの花　未雷
出かはりや目もとおかしきなしの花　麁六「

梨子咲や親子酔たる土間の家　菊虎
竹原にせり出されてやなしの花　肥前一波
かしの枝ましりて咲やなしの花　斗牛
雪空に曇るかなしの花白し　車庸

雑樹

水玉や冷しにうつる木瓜の花　野紅「廿二オ
そら色に似つかぬ藤の盛哉　ひさ

十里菴をたつねて

さひしさの椿咲けり浜ひさし　連山
乗かけを居直る山や荆の花　斗牛
目通りに出して咲する椿かな　紫道

題不知

鼻のほとしらけてすゝる余寒哉　猿雖「
七草や里にはつるゝ家ひとつ　乙野　古月
野遊ひの袂をさかす故蝶哉　りん

たひねのころ

枯のつか　全

如月や菊の夢見る那良の宿　昌尚
出かはりや遊ひのやうに揃ひ立　者十
猿引や猿にひかれて上あかり　菊虎
竹馬の心くはりやいかのぼり　ゆき
かけろふに足とり軽し田圃越　晡川
物干に来てもちよつちよとのん気哉　佐越
春は尚日和につくや蝶の道　禾名

菜の花や婦夫煩ふ壁の透　斗牛
川苣の手癖になるや背戸の道　晡川

ある村居にまねかれて、春の山といふことをおきて、家とうしのぞみけるに

へう〳〵と白雲ふかしはるのやま　舎羅

尾張の国笠寺を通りける時、宝前にてこの句を見付侍るよし、ある人かたりけれは

笠寺やもらぬ岩屋も花の雨　翁

夏之部

めしたけて伊勢迄誰か更衣　其角
綿ぬきやひそかに宵の袖たゝみ　非群
杉の香のわたりてうれし初袷　般里
雲ひとつ見付て宿の袷かな　晡川

郭公

ほとゝきす目あての森や菅大臣　一定
子規手ちかになるや栗林　晡川
かなりにも遊ふ卯木やほとゝきす　麁六
ほとゝきすひよつと聞出す月夜哉　助童
人の顔守りつめたり蜀魂　羊我
お頭に気をつめて聞子規　未雷
ほとゝきすやらといはるゝ月夜かな　菊虎

春風の中を通るやほとゝきす　左由

草　木

田の水の初穂とりてや牡若　宇鹿
くゝらるゝ道の付たる葵哉　菊虎」
銭つなく酒屋の音やけしの花　素計
紫陽草のはなや木槿の向ふ岸　伊天（クラテ）
あちさゐの堀にさし出て盛哉　曾呂
河骨や夕日のかゝる水の先　一知
川骨や水のにこりに花の晴　羊我
ひるかほや敷物はこふ浜の家　未雷
白牡丹幾度のそく下駄次手　晦朔
散たのを並へて見する牡丹哉　楚鉄」（廿六オ）
湯あかりや袂をしぼる百合の花　泥手
かやくやと麦に並ふや組の家　昌尚
かたつかぬうらの堺やゆりの花　古道

晴川をたつねて

枯のつか　全

若竹を見立てたつる菴かな　晦朔
手をかへて山の茂りや若楓　麁六
溜池やほろ〳〵落る柿の花　曾呂
たけのこの出処わろしの麦の間　舎鷗」

生　類

梟や若葉の昼の埋れ声　朱拙
くらかりに目明て淋し鳴水鶏　万乎（イカ）
あら鷹の蹴て行うねの胡瓜哉　昌尚
雀子の出あふて遊ふ若葉かな　磐井
猪のふりかへりけりやふ椿　里嵐（フンコ）
蛙なく木の下闇の小風かな　小雨」（廿七オ）

納　涼

真白な乳房出しけり門涼　利合
さゝの葉に揚枝流すや水遊ひ　紫道
しほ風のなしみも涼し神の藪　舎鷗

この句奉納のよし

松風のこちへ恋しきすゝみかな　助童
からたちに水の行衛や夕涼　霜輪」
樅の木を思ひきられぬ涼かな　佐越
涼しさや中竹はかり嵯峨の宿　斗牛
米の直を仕あふうちにも涼かな　曾呂」（廿八オ）

雑　題

蚊屋こしに雨降かゝる朝寐哉　ゆき
青みたつ清水の色や朝嵐　芙雀
物くふてよく寐る猫やさ月雨　岱水
白雨や掃除して行うらの町　流水
さみたれや蚤も宿とる敷あハせ　怒風
ふたり分はたらく娘の田うへ哉　楚舟」（廿九オ）

（白紙）

秋之部

月

八町のおしやれもまねけけふの月　諷舟
隠れ居てかくす事迄月見哉　楚舟
降からはさゝぬけよかしけふの月　舎羅」
名月や追立らるゝみやことり　利合
おもしろういふて呼るゝ月見哉　左由
名月や一息寐れは雨の音　菊虎
名月や折角あるく我畠　斗牛
水鳥の跡追まはる月見かな　羊我
桐の葉ののこりは縁の月見哉　晡川
粟かりの足手あらふて月見哉　木子
名月やまたけ兼たる荆垣　未雷」（卅オ）
魚飛やしはらく月のかたまらす　曾丁（アシヤ）
山もとや地息もさめて後の月　利合
しほ蓼の穂にいつる月の余波哉　其角
雨次も月みる後の菜大こん　杉風

七夕

たなはたやこゝろせはしき娘中　一定」
七夕や茶入ひねくる部屋住居　左由
たなはたのちからやまたも山青し　古道
さらし着て昼寝を盆の遊ひ哉　野坡

菊　薄

ふらさかる雀や菊の難義貞　諷声
臥先にむかふて咲や菊の花　為百」
しら菊や雨気のかゝる大工小屋　麁六　卅一オ
片隅に名もなき菊のあハれ也　岱水
浦風にふくるゝ垣の薄かな　さい
角力場にとられて淋し花薄　クラテ　丁朝

鹿　むし　鳥

送り火や窓へほたるの連ひかり　麁六」
鹿の音のふところ遍す山路かな　一定
棹鹿のたつや畠の番椒　野紅
山の根をまはりて来るや鹿の声　木子

枯のつか　全

追つめて鷹の目ちるやむら雀　イカ　祐甫
初鷹や風に実のある朝みとり　三惟
聟いんて後はうつらの遊ひ哉　朱拙

去来子にわかれしとき

みのむしのついても行ん旅の袖　晡川」
丈山菴にて　卅二オ
虫なくや松に入こむ蕎麦畠　怒風

題しらす

目さまして何にせうやら秋の宿　土芳
檜物屋の一軒淋し里の秋　ガンタ　是寸」
六尺の拍子してみるきぬたかな　未雷
稲つまの数やとゝかぬはねつるへ　楚鉄
いなつまや川の瀬分る一くらみ　中津　曾帽
いなつまの秋にわかるゝ草穂かな　霜輪
綿取の笠のつゝきや須磨明石　小雨
よめ入の有家並や鶏頭花　為百

蕎麦の花一うね寺の詠かな　稲里
蔦の葉の雫に染る入日哉　肥前　李邦（卅三オ）
松茸や深山のおくの日のこぼれ　イカ　陽和
秋もけふたつ日や川の薄濁り　諷竹
あきの夜に戸敲く人を占ハん　楚舟

冬之部

時雨

鳥の羽もさはらハ雲のしくれ口　丈艸
山の日のせかれて入や初しくれ　イカ　苔蘇
いろ〳〵に時雨るゝ音や椶櫚柏　利合
松の葉を順のこふしやはつ時雨　クラテ　泉晟
暖簾の垢つきにけり初しくれ　舎鷗（卅四オ）
しくるゝや山も買たき向ふへら　斗牛
夕時雨子を負て行乞食あり　加州　意程

雪

はつ雪を持ちからなく落葉かな　杉風
外側は船てみ廻る瀬田の雪　晡川
山のはをかへて臘月の雪見哉　舎羅
初雪やかたふいてみる袋町　般里
はつゆきの明た処を詠かな　麁六
初ゆきやたらぬ心て降添る　一定
髪置て使したかる雪の間　楚鉄
はつ雪や菴に付たるひとり扶持　沙明
椶櫚の葉や証拠に残す夜の雪　舎鷗
腰かけにてうちんおろす雪の音　イカ　和水
降雪をなりたけは消す冬日哉　木子（卅五オ）
はつ雪や薄いところを掃て見る　千露
雪降や榎を出る鳥の声　日田　寂芝

霜　あられ　氷

俎の音に気をはる霜夜哉　昌尚

乳もらひとしれて戸敲く霜夜（マヽ）　素竹」

さゝ葉ゆふ落葉をくゝるあられ哉　杜若（イカ）

つめたいといひ〳〵なふる氷かな　菊虎

雑　題

故郷に行人に

花咲て梅や冬木の仲間われ　長崎女明

麦蒔に取ひろけたる梅の花　始流」井六オ

茶の花の見ゆる小家や伏見分　不白

何の木と今こそなのれ冬木立　古道

吹込て座敷をはしる落葉哉　怡々

浅川に菜の葉流るゝ寒さかな　曾呂

かた炭にはなしの出来るさむさ哉　昌尚

彦山の禁にとまりて

真中に坊主の寐たる寒さかな　未雷

留主番の居りたかりたる火燵哉　フンコ乎麦」

浦風に寐やう覚る火桶かな　晡川

寐時分の寒さをならふ背中哉　岱水

こからしや兄弟並ふ糸車　舎鷺

十分に冬枯見ゆる小村かな　左由

衛鳴河辺は寒し月かしら　砂乙（クラテ）

猪の里のそきけり寒の内　晦朔

猿の目の木に離れたり冬の月　雪芝」（イカ）井七オ

年　暮

おもしろき連をとはゝや年の市　素交（イカ）

としわすれ膝やまくらも手のかゝり　為百

花になる空とも見えす年のくれ　麁六

江戸川や網代にかゝる煤の微塵　利合

道かへて故郷の雪に年わすれ　舎羅」

枯のつか　全

箱崎　十里松

はこさきや八幡大名萩の庭　宗因

大守公の御前にて

枯のつか　全

御ン門や箱崎生の松かさり　全

両袖に涼しはこ崎生の松　元順

箱さきや爰にては鳩を呼子とり　言水」井八オ

ひハたふく日のめのふたや松の苔　惟然

凩や松にはぬるし十里潟　古道

福岡　博多

もろこしの菊の花さく五里の浜　支考

ふくおかや千賀もあら津も雁鱸　去来」

未雷亭をたつねけるに
留主なれは福岡に
通り侍るとて

五里の浜宿とり兼て鳴雲雀

龜六亭

福岡や花と汐干を旅ね哉

斗牛の村居にまねかれはへりて

月花に来よとやかゝる小村住

次の日興行

春の日はたゝさへあるに庭つゝし　野坡

昌尚亭にて博多といふ。
題をのそまれけれは

家並か博多は花に海の音　〃

箱さきの社家にをの〳〵つとひ
雨中のあそひさま〳〵なりけるに
其中より発句望れけれは当座の心を申

やまふきもちるか座敷の鞠の袖　〃」

舎鷗亭

艸の戸やおろし鮫に杓杷の験（ケン）　〃

枯野塚十二日の興行はしまりけるに

花の次の出合はしめは十二日　〃

十里菴にて福岡の
連衆もよほされ
留別の会あり

行春や座はかきさかす松露取　〃」四十オ

昌尚亭　廿二日

椿さく春はまたあり松のわき　野坡

〃」井九オ

曾呂庵にかねては月次
興行十五日とさため置
けるにこの日黒崎の道つれ
あれは廿四日にとりこし侍る

明日の分見え行菴の桜かな
骨を折たるはるの竹の子
未雷亭　いひ捨

五里の浜月抱とめてかりね哉
菊と一度に鳥の来そろふ
満作の穂つらにあらし吹かけて
傘もとす市の六齊
半疋のさらしを膝に裁ちらし
のとかさや寒の残りも三ケ一
うちかへしやく雉子の胴がら
臺にたつ冬菜のつぼみ伐捨て

、
曾呂」

去来
未雷
江立
晡川
一定」
四十一オ
利牛
岱水
翁

この三句は京のかたよりきこえ侍る　」

箱崎の浦に枯野塚といふあり。是は先師はせを翁の、難波の病床に吟し捨たまひけるとなんを基として、松かけに世をいとへる晡川といへる人のきつきけるとなん。予ひと〻せこ〻に□(蝕)(「まう」カ)て〻、これそまことに御句の聞納めなりしなと、むかし物語申けるつゐて、幸にその夜侍者にか〻せて、人〳〵に見せ給ひける御句我かたにあり、家に帰りはへらはかならすをくり侍らん。かつは先師のかたみとも見たまへとちきりわかれぬ。かさねてみやこよりのたよりに、これをまいらするとて、予も発句をそへてつかはし侍る。ことし同門野坡こ〻にたひねせられしにすかりて、此集とりたてけるよしにて、序は杉風に乞。是に跋せんことをのそまれけれハ、又この文をまいらするものなり。

嵯峨野去来跋

宝永甲申夏　晡川撰

京寺町二条上ル井筒屋庄兵衛板　」